

會稽三浦輿言

四

~ 13
3114
4



門へ 13
號 3114
卷 4

筒井

會日統書三浦與言

かたなをり

會日統書三浦與言卷之四



星合寺

浪速
高木よそ



井

岩附町
四番地

東路の何國ハあきど名小照らと星合寺の小松原老木も千
代の色添ひて枯梢も十か月の祀を咲せし御佛の誓ひハ四
方小鳴高き松樹の観音とて子孫も身ハ海更不憂をば
あふ美地なる二日當國の任人大場の三郎景親おほく合符
俣野五郎景久石橋山の合戦小打勝勇むら人の物詣り
兄弟づきの下向道中あも五郎景久と真田の兵市を討取
自慢の鼻も高股立兄小進みて行足馬場先小差かまの
う小大場との御殿あき射染、観音の利生を祈り我言古の

三浦與言卷之四

的場無入軍中の若侍聚りぬ日るに小胤の子二匹居ぬを頼
 頼うあまそ所為連も叶ぬ謀叛を起し天下を騒ぐと一大支隊
 閑と懸ち射ても居らぬ咎且も観音の迷惑大悲の言も智
 恵の笠則も連るるて淋しかりと誠を突合るましく神も解も
 時代の権のいつうも動ぬ平家の威勢浪入つきの兵清の仇
 頼朝徳小三百騎も足らぬ拾ひ取め軍勢を以て北太場
 小又向とんと富士山を登り家籠生捕して日向責皮を剥
 て呉んざりの取返せしそ残念たふと他人交せとの廣言誰
 小遠も悪も草木の陰も業越し小肉く銚印ハ金唐草の短冊取
 和歌小心の優しくて勇氣の鬼も取ひく梶原平三景時心小
 深き大願の後より愛小浩でくふる事と見えぬ大場見物

是ハ梶原殿御参詣と存する御同道申さん物と挨拶
 這方も會釈大場殿侯野殿も打揃ての御信心滅今度
 の戦い味方勝利を得し夏も号矢を守ふ松掛の觀世音利生
 は止小あつたつたて猶も人の中も佛の力信とふ小志くはと挨拶
 扱も終らぬ内なる梶原殿觀音の力を頼んで軍小勝と武士
 の詞小似合ども穿鑿是たふ兄弟大場の三郎景親はしわ
 角中朕野の五郎終小番門品一卷と讀誦世夏みけねども
 今度鬼神と呼ましたる真田の子市を取て押さぬ首小あつ
 ハ我剛力のるど所平家の大刀風小恐まで頼朝の尻小帆をけ
 落行ふの不及ぬ大場軍術秀しゆ假令佛とおもふはあま
 氣暗かてこの参詣是ハ浮世の互法といふの觀音の利生



俣野五郎

大場三郎

小
眞子

茶生

松原

星合寺の

梶原景時

梶原景時

梶原景時



山田三作の巻之四

不て勝はしき軍やも勝たさやうし御一言余今聞ても不対例
 嗜こあまといふ心は高慢小礼をさるる無骨さよふ六ひさる
 虫小障り御機嫌を損ひひ提原が言下手真平御免下こいよ
 佛神の力を救り武士の身の不対例一分の瘥たふといふ夏片矢八
 幡此提原只今まで存せども是を思へ往古の坂上の田村麻呂
 鈴鹿の鬼神を随久らまじも観世音の利生を蒙り外例を是を
 さま嘘じ後悔小思をまじつゝえとお笑し流石も鬼神小横道る記
 大場兄弟迷感が不提原もさかろろ小笑止さ藤子河のつや肝心
 の樂しさをまつたると失念せり此馬場先の松風を釜のたきつて
 閑して持参の茶箱拍波く共御西所々此場の志くけし汲汲
 茶の手前小色後分色を由縁の紫帛紋青漆霞の
 を懸き六是も又三思置堂目の心地ごと楯を取ら提原が
 の花を優美なるふ

○ 刀 子

世の中は流小波まね身のう人や室八時の指合せ惜まぬもま子
 室の娘や聲の名を惜む老々一途の思ひ川深き心は亀文の刀箱
 小二個つぎ大場も前小両手をつた忍びさろ殿様御所中
 此祖父の惟子が過小住居いそと青貝細工師の六郎大夫魚ての
 御所望下さしし所持の力多小金子の入用おまゝ差上たは
 ひの待設けたふ赤清の御下向刀を召せ下さきるゝ新有
 思ひろて願ひるも大場の三郎打らまつた同及び青貝師の
 即大夫所持の刀を賣拂ひいふも魚ての望も珍重く幸ひるふ

小御座あり提原殿の本阿弥増子の目利者有九竟の折り心
 小きへ入たる望のよりの價を得せん刀ありと有りきと氣に
 御詞娘此刀を殿様のお側へ早く持で行と悦し親の詞の下ゆ
 立居もよめり小臆め方なり刀箱大場が前小指置去来流
 苦勞なかり提原殿御目利たのこいふよりの不娘は若狭者是の
 冥加もる我の風情が刀の目利誰有かそ提原様おは下され
 とへ爺ははふも悦い多難有仕合名と會釈もおひ不情氣無
 平三景時つよと笑ひ六郎大夫とやらんが所持の刀中へ茶が家
 の重宝提原が定まぬ眼小くけて免や角中も不遠慮此義の御
 免下さるごとく辞され免さぬ大場景親是之御並退却して
 貴殿御目利下されとへ不平等の感ひも叶とて手前とて
 心残り是非小較と存むるといふ小景時せんくたあはは誠
 中も氣の毒然く拜見致さんと侍り立て松もなる平水鉢小
 差のき六郎大夫裾をひく我つよと所持の刀御目利と悦
 なる小御手水返ふに及ぬ夏口其俣ふと止むふや否とあは
 たとへ持主誰ゆしせよ名作の刀と聞け武士の尊む所文の鏡武
 ハ銀とよとよ止まふ日の本の神宝疎畧少の致しと礼義を乱
 さぬ清めの平水心の濁り曇りたる銀のさかん押はるた扱を
 せぬ雲るに夜半の月の影漲る瀧をてとせあつと怪しむるやの
 釘の焼又鋒とたらし物打釘免鑄指裡指おりて一占量る
 名作小提原覚えと天晴奇代の刀ありと感入身未月あり
 平三景時数種の釘を見たりとてとて程の名作を平水

平三景時数種の釘を見たりとてとて程の名作を平水

古又今う始めの終りうらんを無銘といひさうさうの銀の験
 中心の内ふあつくと八幡といふ文字をまきたるは出所は嘘と白刃の銀
 求めて大場殿家の重宝小せうとまよと詞の又たまよと流石の目
 利大場と殆機嫌は体貴殿の御目小左と使で御慶美あれを
 慥るも道具某も大慶を極いふ六郎大夫其方願ひ小まうせ
 刀、其も求め得せせん價の金子、何はさうやと尋ふも不稱平伏
 難有た御詞先刻も上さうも急小入用の子細あつて金子の望
 ハ三百兩下置あつ物さう六郎人ともた満足せん願あつが
 様三百兩とふも出さう梶原殿小御目利たのし手前もあま
 望このよひ小求め呉ん誰と参つて六郎大夫へ金子を呉よと
 いふ下うさうと登て近習の侍小判の包さうのたせ物小指

出ふ侯野の五郎やま待まよ兄弟者人最そつと御念が定中さ
 は此刀の出来塩ホ母草雉の宝釵村雲は御釵小増さ上作小
 も下切味が悪くてハ輕うたおも違ふ考まつと様さぬうち重宝と
 も定まよ一應も再應と吟味あれと云やく梶原もむつとせが心
 の料筒崗ねさ六郎大夫ハ氣の妻の身のかつた系又物の言分
 せん侯野小むらひ切味の善悪ハ見考ふも有へた其其う人小左の刀
 ニハ胴小敷腕ハ豆腐切ふさうやと安くと傳へ重宝さうといひ
 をせも果さうとた白眼三三百兩の金子ハ不云さる見せ
 うも律義の持りの買さつとせん工さよと呵つ付て云散まハ取付
 島も技首の娘親子が心在察して梶原平三ハ小大場との侯野
 どの某が折角目利致せ此刀切味の不審とて御求めたも本さ

景時

お母さまの
大場侯野が

為の
為の
為の

鑒定と

大場三郎

梶原景時

侯野五郎

六郎太夫



昔噺三浦義経巻之四

六郎太夫

梶原景時

大場三郎

ろに又一ツ火又梶原も分も異るりの利と鉦の現の證は死
 罪小極も科人あゝ引出て様者其上下て二ツ胸が切きさる時
 は是非も無益の論を存とふといふ小大場も打點頭を尤様
 尤の御料簡誰獄屋全あると死罪の者を引出せ早くも下
 知をると色も大場が家来とも畏まつと支をゆく道も程も紀年
 家のあつて御付一人引連て大場もまへ小腕つき大勢の卒屋のうち
 帳面吟味致し所死罪小極も科人の漸小北者一人今一人の様者
 いく計らいやきんやと窺へた大場の三郎の毒顔某刀をりとめん
 て落着も致さね外の科人理不尺小断罪も相成はし先今日の六郎
 大夫此刀を持かきといとまて吐胸つつり老の科簡由惑の色
 目を見て取娘のまど申も叶えぬ大場のねがひはるに支ぬふ間

て先刻の思案のおとく彼方へ奉出ふと行き望の人のへを
 苦小もとも早く飯を淡合ためめおときと勇むも親の氣を休めら
 孝行も久くて表さると六郎大夫の最前も差うのむて居たじも横
 手をうつてと色も能く思いいじたと十年あまりと以前の支伊
 藤殿の御方もと據られた御所望もつて此刀を御目小熱はると死
 彼方でて試しの様者もつつ胸を切たるとの極めの證文下さしを
 平日の刀小添置が某の毒もうひ小取もぎとつたると失念宿下置
 て参つたと只今娘を取出つし各様小御覽小今を其上おて此刀
 何卒召下さしとねがふを伺て何と二ツ胸の極めの證文東
 の次郎が添たふと究竟の折紙行時も名を取寄せと梶原の証
 配小熱ら娘の宿飯其證文を取来と佛檀の下戸柳の意小

二行三浦與義卷之四

〇八

引出ふ入置いぞ大古又ふかけて落さるゝ父う伺ふわいの返さるゝ
うい孫娘の揃吾家をばしてたち飯ふ

○二ッ胴

かくて六郎大夫の娘が顔を見送らうと候さうらに大場が前小つくとお
二ッ胴の様者今一人の不足の所、輕女がら此老やま一時も早く刀
の切味御覽あつて三百兩の金子を正置きよと前後揃をね願ひの
品不審も晴と狼狽者揃ひて一命れ命うまても金片したる無
分別さ親父めと嘲笑し詞の下丸を極の御咎め千貨万貨の室
よもも重た一人の二命さなも又美ふつて捨ふとた六産芥さるも猶
輕くはしてや積も老のうら形を五調さ七十九歳の春秋をつも
つくと頭の霜胡や消んゆべや消んと死を待たうの身のう人小美理

小迫つゝ娘の難義まちくと見て居らまは代るも刀の親の慈悲
心三百兩の直打を極め我子の為の折紙とおり八命も惜うらひ
此う人の御情少の娘が飯と来らぬうも此體を早く揃へるを叶
へてトとまじし伊東殿の沙文あつと申せも偽り娘う側小付添ひて
見教り少教りまほは左とわの夏の妨と存さるゝの向小合喧何事も
三百兩の金娘少のいたなきとらうと悼つお付き夏かろと梶原さほへ
此金子御預けに娘う飯とてゆつ夏の子細を仰らま御に下
さし偏小頼きたてまつる去来大場様侯野と使老の聖を聞
分て命をさす下ささよと詞を尽し理をのト余義も頼しそ不
便な大湯の遠小刀の御も原来氣強うまは徳りの
まも願ひ見と段々の一通り同届けよう望ままを様

死後の美は氣づいせぞ此金娘小渡さん下筋の未練か心うら
 三百兩の金子と大切小思へ念をいとも道理を大場大名付
 是式の夏を提原との小御苦勞懸あ二洞更切身たる價を三
 百兩の限らぬ五百兩下ても千兩下ても速に娘が為小思くせし心
 安き行時と早く最期の支度所幸い是か射採の前家来
 用意と奇立まの原來光朝の六郎大夫御向届を雜有と二人小
 一禮賑然と先小進入て的場のうち射採小抽た矢切りの作
 在名残の裁力節くれ立た系老の手小引りたく括りそ九右の抱小
 結合せ手はうう開入最期場所真中小のうと座去来御家来忠
 御大義さうと某小繩打た人科人敵も早く是へと呼小引出を繩付
 師匠教た泥坂漬酒う教つ科人て是もいんく色真青竹

頃小追入ま是しく不思美の縁あて六郎大夫が冥途の友と
 扱まんもいんく眼切らまぬ先うう魂中有利迷して見小けか任
 野の五郎景久、肩衣取捨刀引提立んと提原哲と押とめ合見
 大場との御敷とあつじゆ目利と及せ果小一言の礼受もろ御
 が彼おを操さんと余まとも踏付た系法外の不礼御兩所近頃
 りつて似合さる所為さるも面色筋とありく六僕野の五郎手
 持し口今此刀と貴公へ御渡り中御挨拶をもささんと存せ処
 御答め小預と却て迷惑連との夏小目利下き色御苦勞小
 二洞あそせと刀渡りて扣あき平三景時あつくと刀携へ極小
 入其方う除美らた心老の身の命を軽れ我子を思む神效
 感とみ録り小景時が望入て手に懸る最期を清くせん

為此世ハ子の名の聞るるも未承ハまき不明らけき月の光
と満とも小銀の徳ハ影の遠くうらむ心の曇るるを晴まき情
の詞小頭らを下け六郎大夫の身小取て善知識の引渡す
猶有づいた御恵きたと以下良の手小かると相見ふとも是非
小推有つて故東一文武の勇士と呼ばれ又梶原平三景時と
に拙き體を操るるも天晴果報の人の病死するも百倍奉
望我子小あたゆふ三百兩ハ參摩黄金の佛果の種浮世の殘念
曾りつてさけまじと娘が立戻り嘆じ歎きせん恐まき世
活ふと涙をかくと笑のうら目のふおん里の一帯つと泣くお
もきあてしり小猛き梶原も顔を背けて目を摺まるる角共
知るも娘情ハ爺親の詞を直受小極めの澄文とふ咬つて尋

ぬきども尋ね當らと是非も何の心もつくと戻つて見
此場の様子も情もや父上小何科あつて誰が傳つて
てと叫びつて垣小絶つて泣けま六郎大夫顔少おけ其方か
鷲鳥の理つとあかき氣を鎮めて歎きまをめぐりま此上小
あかき慈した夏目有ともかるるに鷲鳥くまさうま子細ハ
ふて合息終じ去來梶原様早う娘が歎きを不便小思ひ
ま猶豫かされ下らる程情の罪科一おしすつとと梶
むせわつと内らうとまきと悟ら娘が悲しを借ハ父の身を
捨て搦りの小まえとわいふ小刀が賣死して鍊つとと咽泣
娘が心の悲しきを思いやつて下まきしたと千兩万兩の金も
親を救した刀の價をうていふ物あり梶原様あり

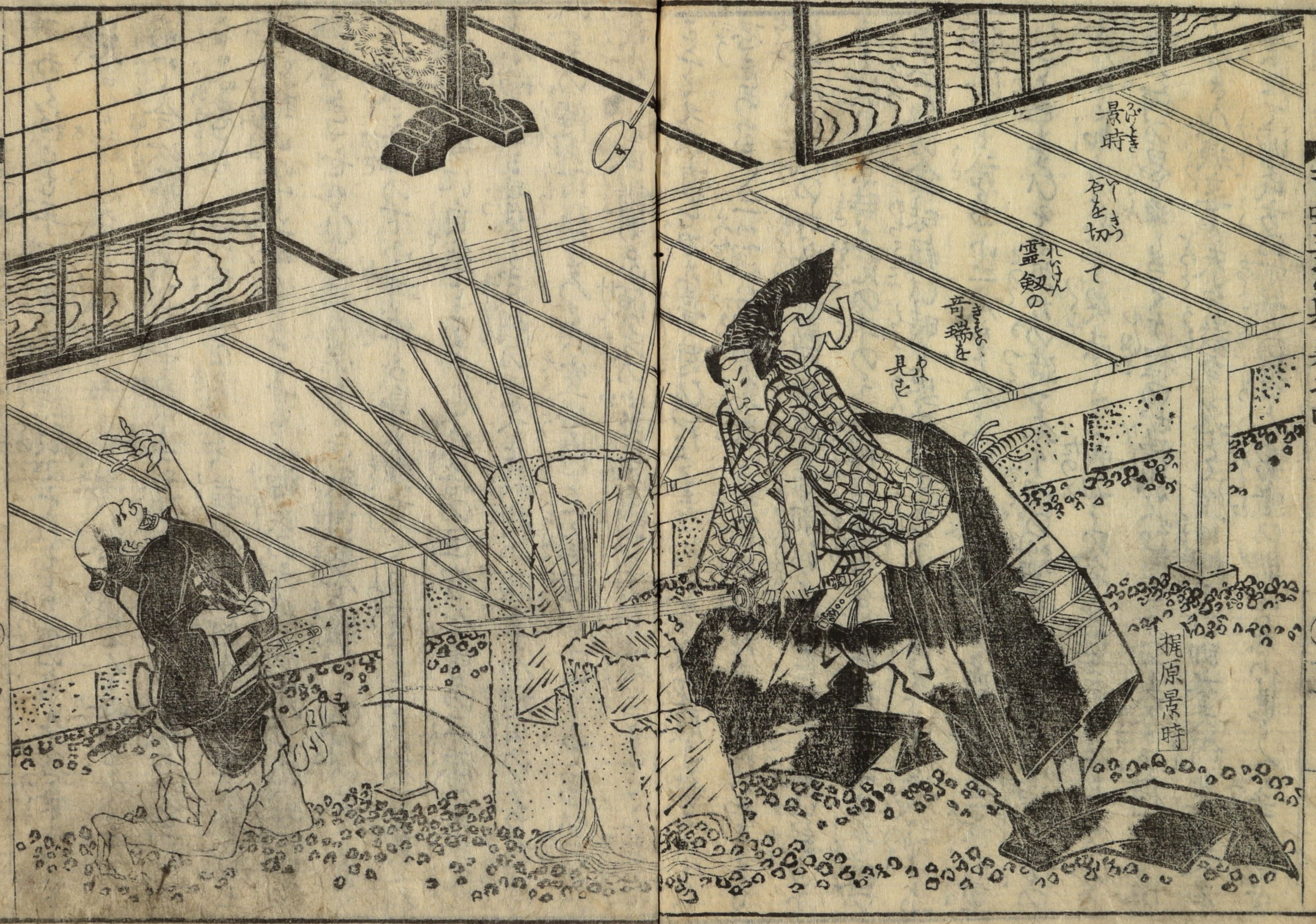


跡忽あどつとふ其代つとふ我身と様とつと様とつと是
 うと御慈悲お情少六郎入てあの魂解てあつとと泣叫ふこと
 通理する六郎大夫色あうけ返らぬ支を叶と人操言八
 十小手の届く娑婆婆塞けの此骸戻りかけの駄賃命三百両小
 ハ紐まき賣物貯ひ立ハ結句不孝良人への美理ハ何をりつて
 たてを思ふ哉未練者めと怒つて見せても娘の揃現在親の死
 ぬあを見捨良人への美理を平よと我身小更く是朝ふじか
 ら支と知ふあふいふも隠し包とるるとも傾城奉公小行人
 の下種の智慧ハ先へ氣の付ざらじが悔やと身を悶へる
 叫びきた父へあぐとていふ人への娘制とたといふ小情も勇
 卒もたつとつて押退まといや離じと取付竹垣内小立三
 層時が差圖小かさねつとつこの骸六郎大夫ハ観念の眼を割大場元
 身目を放さむと並わふ家来も冷汗の玉もと散ふ刀は光り振
 おくか手も切さむと尖き釘の拜ち音をのたつと破煙の血を三
 波と漏かへる人の死骸を引退ま六郎大夫ハ茫然と起あつと
 骸のうち御も海つくと縄目を不思議小切も解ち氣も空蟬の
 うつとひとん娘はつと嬉しくと父上の過ち多くも命をうとつと
 夢の覚たふ心地と目利遠ひの金味小此場の味を握らつと
 苦切たふ不首尾小付込と大場侯野ハ嘲ふ色の高笑ひも作
 とちまふつと人作とちまふ目利やら音やら訣もさし際真儲
 とてひやひる金と三百金を引扱と去来大場殿法飯とと候時
 の五郎つとつきて挨拶とらつく立飯ふ

石切梶原

斯て詭め六郎大夫氣を約め件の刀取上て娘とてをいふを
 早く弓手の脇に突立んとて所を捕うけ寄らざらば
 今指す御命切腹と何支ぞ情を父上死神が付たふに
 い御氣遠うと泣きとけい振をほし何ゆゑの切腹と不思議
 命のつきたふ面目さふ不覺期を我心の急く由路先とて
 理く六郎大夫が幼女とて七十九歳の今日まで身小添り此刀
 天晴名作希代の宝と人の翫ると詞小乗の鈍く物とも利
 とし弁へあふ心の自慢一人の聲小廣言放ち氣遣とて清合
 たふ三百兩の價の金安のうら物案の相違我身と果ては身の
 言訳後の道理を問うけて智手前の執成をうらうとて歎と云

とて又取直と刀を景時ひつたるを程の名釵切腹小藏さん
 恐まわつと二の胸の愚の度目小見へ鬼神たるともたわらも
 後へん希代の打物和國の重宝最前汝の通達は金釵の鈍き小
 ちふは景時覺の手のうら轉の縄目を解て切と解く手練の
 並合釵の金味疑ひ晴し安堵せよ吾小刀を得とせらば價ハ
 任はしと語ふ小二人とて伏し悦びあひこそ道理も景時重
 ねて色をひそめ此刀の造りやう河の端を思ひ合さ小源氏方の
 由縁と知らむたを契床とて頼め死名を明さねと尋ねふを
 損ハ何の思ふもさく程のお情かむしとてうらふ今更何を隠
 しめせん賤妾が夫を教ふる縁といひ口押して六郎大夫何を何処へ名
 乗たて源氏方の所縁の者と勇者の眼小見らばとて入ら争さふ



景時

石を切

霊劔の

音響を

見よ

梶原景時

小あつねとも平家方の梶原殿小をいそと夫の名を名乗るふ不
 足るを疎忽るる御息、御息敵ハ敵と用カを憎とて子討小
 あつね合次身と木を切て投出と河梶原不とんと感ふの天晴
 うる忠臣く其心腹を問うる梶原平三何をり包まん今般土
 肥の相山小て落人とあつね源氏の大將兵系佐との卧木の衝
 小徳きせめいを梶原うよき敵討取んと駈むうい何の苦もあつ
 うい執り膝の下小押伏しが身も強直て自由あつて六不思議
 並ハ赤姿に自然とそまらふ武將の位智仁勇の三徳を並て
 小増まる骨が武門の宗へ在れ朝小輝をん御目のうち梶原
 つきの侍が討たてよるあつね空とらと一念思ひはしると思ひせ
 小秋先祖ハ由緒あふ源氏の家臣當時平家小祖とまとも元祖

の古至小かへつ忠二心ともよる云はし御運のひらくる時節
 御命を助けまのる大場を越く梶原形と當前平家の武
 士魂ハ先敵の御膝元を守護の武士我身命を懸つて忠勤を
 言ふはしそき故小世小疎き侍人後者と指さくき死後の悪名う
 くるもいつか何み厭たね所存却辺が胸を見居く由一大変を
 明とそと心を残さぬ物語なく親子の疑ひの晴れぬ身
 の悦ひ心の隔てふはけきとも素向敵味方名作といふ浴敷も
 此カ押付賣といふも口惜し御身のう人の事分もいつかあつね
 浩からん実そんを梶原う手の内小名作の澄様をきんせん玉
 来と二人の手をとりて目影小向とせあ見らまよ親子のま
 おつねと移し影を其が今手小うけ様者死とふ者あつね

敬(けい)と云(い)ふ(ふ)も時(とき)に重(おも)宝(たから)秘(ひ)藏(ざう)の刀(かたな)の切(き)り見(み)ると二人(ふたり)を(つ)ら
と教(しゆ)法(ほう)師(し)を(つ)下(くだ)と(つ)討(う)たふ(ふ)平(へい)水(みづ)鉢(はち)厚(あ)き尺(しゃく)余(あ)の青(あお)目(め)の石(いし)の(つ)ま
きて(つ)親(おや)と子(こ)う(う)親(おや)ハ(は)別(わか)る(る)や(や)二(ふた)の胸(むね)釵(かんざし)も(も)釵(かんざし)切(き)入(い)る(る)切(き)入(い)る(る)備(び)こ(こ)る(る)酒(さけ)氏(うぢ)一(ひと)
統(たう)の御(ご)代(だい)小(こ)秀(ひで)に(に)梶(かぢ)原(はら)平(へい)三(さん)鑑(かん)合(あ)殿(でん)の政(せい)務(む)の沙(さ)汰(た)万(ま)の(つ)下(くだ)知(し)彦(ひこ)
つ(つ)子(こ)久(く)名(な)を(を)下(くだ)知(し)く(く)と(と)云(い)ふ(ふ)名(な)と(と)武(ぶ)士(し)の鏡(かがみ)と(と)世(よ)小(こ)綿(わた)や(や)は(は)男(おとこ)
六(む)郎(らう)太(た)夫(ふ)大(だい)吉(きち)不(ふ)悦(えつ)ひ(ひ)今(いま)と(と)武(ぶ)藏(ざう)の(の)名(な)作(さく)の奇(き)特(とく)を(を)成(な)す(す)と(と)御(ご)釵(かんざし)上(うへ)
中(ちゆう)父(ふ)娘(むすめ)君(きみ)情(なさけ)小(こ)柄(へ)篋(か)の命(いのち)の親(おや)つ(つ)ふ生(なま)まの(の)ま(ま)御(ご)恩(おん)ハ(は)厚(あ)き(き)き(き)短(たん)
泣(な)く(く)ま(ま)し(し)の(の)度(たび)引(ひ)替(か)へ(へ)慌(あわ)て(て)泣(な)く(く)涙(なみだ)京(きやう)時(とき)も(も)身(み)の幸(さい)ひ(ひ)を(を)輝(かが)や(や)と(と)星(ほし)合(あ)寺(てら)
の(の)小(こ)松(まつ)原(はら)親(おや)子(こ)と(と)伴(たご)ひ(ひ)立(た)飯(い)ふ(ふ)家(いへ)の(の)苗(な)字(じ)を(を)相(あ)い(い)あ(あ)小(こ)鍛(た)治(ぢ)の(の)鍛(た)小(こ)奇(き)
代(だい)梶(かぢ)原(はら)弓(ゆみ)矢(や)の(の)答(こた)え(え)矢(や)筈(はず)の(の)紋(いり)今(いま)小(こ)其(その)名(な)を(を)残(のこ)し(し)け(け)り(り)
會(かい)誓(ちか)三(さん)浦(うら)與(よ)言(ごん)卷(まき)之(の)四(よ)畢(ひ)

高木ヨシ藏



會誓三浦與言

會誓三浦與言

梶原弓矢の答言



